

やすだ のぼる
安田 登
 能楽師（下掛宝生流：ワキ方）
 寺子屋 講師 （阿弥陀寺）
 こどもおばけ合宿 講師 //

主著に『論語』『あわいの時代』『あわいの時代の『論語』ヒューマン2.0』
 『能 650年続いた仕掛けとは』他多数。

こまつたとき 親鸞の聖人 鳥



イラスト 中川 学

親鸞聖人の「正信偈」を読んでいますが、今回はちょっとお休みして私が出演しているラジオ番組のお知らせをさせていただきます。

NHK第2放送の「日曜カルチャー」という番組です。

人生に効く古典文学

番組」ということ。

私の担当は6月で、テーマは「人生に効く古典文学」です。日曜の夜

8時から1時間の放送です。え、6月って、もうすぐ終わってしまうでしょう」

そうお思いの方。この番組はスマホ、携帯、パソコンで「聴き逃し」ができ、初回の6月1日放送分も、7月27日までお聴きになれます。NHKのラジオ番組の聴き逃しは1週間というのも多いのですが、この番組は太っ腹です（笑）

「らじるらじる 安田登」と検索してみてください。さて、人生に効くって

どういうことでしょうか。これも番組のホームページを紹介しましょう。「古典文学には、現代の私たちの悩みを解決してくれるヒントがいっぱい！」

というところで「古事記」・「平家物語」・「太平記」・「能と世阿弥」・「和歌」・「俳諧」の古典を紹介しながら、生きていくヒントを探っていきましょう！

介しながらお話をしています。本紙では、各回について簡単にお話ししようと思っっています。

▼古事記

初回は『古事記』です。タイトルは『古事記』と世界の冥界下り』。

タイトルの通り、『古事記』だけでなく、世界中の冥界下りのお話もしています。

『古事記』は、日本語で書かれた最初の文章。上・中・下の三巻ですが、特に面白いのは上巻の神話の部分。

みなさまもご存知の天岩戸神話やヤマタノオロチ、大国主命や因幡の白兔の話などが載っています。

文字が使われるようになってから私たちの生活は激変しました。たとえば階級社会になったり、男性社会になったりといろいろです。これらは古代の中国の価値観が文字によって日本に定着したものです。

しかし、『古事記』は文字で最初に書かれたものなので、文字以前の記憶が残っていたりするのです。それを探るのが『古事記』を読む楽しさのひとつであります。

特に音（おん）がない文字、これが面白い。たとえば「海」という漢字は中国から入ってきました。中国ではこれを「ハイ（カイ）」と読んでいました。昔の日本人は「あれ、これって日本にもある『うみ』に似ているんじゃないか」。そこで「海」に「うみ」という訓を付けたのです。

クウと読まれていた「空」には「そら」という訓を付け、ゲツと読まれていた「月」に「つき」という訓を付けました。

ところがもともと日本になかったものには訓を付けることができませんでした。

たとえば「字」。いまは「あざ」とも読みますが、これは字とは違いますが、日本には字がなかったので訓がありません。

動詞でもあります。たとえば「感」。これには訓がありません。じゃあ日本人は感じなかったのかというところ、そうでもないのです。なにかとても嬉しいことがあった場合、「うれしく！」というのと「私は喜びを感じます」ってちよつと違うでしょ。「感じる」はちよつと冷たいというか、なんか遠くから見ている感じ。日本人は嬉しいことがあったら「うれしく！」、悲しいことがあったら「悲しいく！」で、「感じる」はなかったのです。

純粋な子どもみたいでいいでしょ。そして、ラジオで扱った訓のない漢字は「死」です。「死」も訓がないでしょ。では、古代の日本人には「死」はなかったのか。どうもなかったようなのです。では「死」をどう感じていたのか、それはどうぞラジオをお聴きください。

また、世界の冥界下りではギリシャ神話のペルセポネとデーメーテルの神話を朗読しています。NHKのホームページには「榊原有美さんの朗読は迫力満点です！」と書かれています。

▼軍記物

二回目は軍記物、特に『平家物語』と『太平記』を扱います。

この二作品はEテレ「100分de名著」で私が講師と朗読をつとめました。阿弥陀寺さんの寺子屋などにもよく出演する金沢霞さんの琵琶でラジオでも朗読をしています。こちらも番組のホームページには「琵琶師・かすみさんの演奏に合わせ、語る「橋合戦」「富士川の合戦」「赤坂城の戦い」は大迫力！」と書かれています。

『平家物語』は「祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり」でよく知られています。この「諸行無常」、いろいろなこと

は常に移り変わると思われていますが、そんなに軽い意味ではありません。諸行の「行」は五蘊(ごうん)と呼ばれるもののひとつです。

五蘊とは物質界と精神界とを表すもので「色・受・想・行・識」の五つをいいます。

私はよく小学校で授業をします。

私が児童の前に登場する。児童としては、先生とは違う見たことのない人が突然現れるわけです。これで五蘊を説明しましょう。

まず「色(しき)」、これは存在をいいます。児童にとつては「安田登」という存在、それが「色」です。

そして、そこに存在が現れれば、必ず何か感じます。この何かの「感受」、これが五蘊の「受」です。私は紋付・袴姿で児童の前行きます。すると児童は「この人は何をしている人だろう」と想像します。これが五蘊の「想」です。先生が「こ

の人は何をしている人だと思いませんか」と聞くこともあります。小学生は「落語家〜!」といっています。

すると先生は「この方は能をしています」と言います。これで能楽師だという知識が与えられます。これが五蘊の「識」。

彼らが六年生ですと、社会の授業や国語の授業、あるいは音楽の授業で能に接したことがある場合がある。すると「あ、あのつまらないやつか」と思う。知「識」によって、「想」像が書き換えられるのです。

さて、いままで「色・受・想・行・識」の「行」以外の四つの説明をしてきました。最後の「行」が諸行無常の「行」なのです。私をバツと見た瞬間に「何かイヤだな」と思った児童がいるとしましょう。彼は私が能楽師だと理解しても、まだ「何かイヤだな」と思っていると思います。ひよつとしたら記憶もない小さい頃に私のような顔の人に叱ら

れた経験があるかもしれない。あるいはもつと昔、前世に何かがあったかもしれない。

そんな自分で意識できない、無意識やさらに深い集合的無意識、その塊を「行」と言うのです。

「諸行無常」というのは、そういうことすら変わってしまうということですから、今までの常識も何もかも変わる、それが『平家物語』の時代でした。

現代がおそらくそのような時代です。AIの変化はかつてないほどのスピードです。あと五年後、いや三年後は想像を絶するような世界になっているかもしれない。

そんな時代だからこそ『平家物語』や『太平記』を読む意味があるのです。

▼三、四、五回

おっと、書きたいことを書いていたら、もう字数がなくなってしまうました。あと三回は簡単に書きますね。

三回目は能です。タイ

トルは《魂を鎮める能と世阿弥の智慧(ちえ)》現在の『能』が完成したのは、約六五〇年前の室町時代、父・観阿弥と子・世阿弥によるとされています。

ラジオでは、まず夢幻能である『定家』の物語を紹介します。夢幻能というのは主人公が幽霊や神様などの人の目には見えない存在です。

その見えない存在を、お客さんに見せるのがワキです。そして、私は能のワキ方に属しています。なぜ幽霊が再びこの世にあらわれるかというところ、この世に残した念(おもい)、「残念」があるからです。ワキは、シテの残念を聴き、その思いを昇華させるといふカウンセラーのような役割をします。そんな話をしながら、「ワキ」としての生き方も提案します。

最後には、観阿弥・世阿弥の名言「初心忘るべからず」の「初心」とは何か、「花」とは何かもお話しします。

第四回は和歌。タイトルの《魔法の言葉「和歌」の力》です。

日本では千年以上前から、歌には特別な力があると考えられてきました。その力は天地を動かし、先祖の霊を慰め、男女の仲をやわらげるといいます。そんな和歌の魔法の力を紹介しながら三大歌集『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』の中の「黒髪」をテーマにした歌をよみ比べ、柿本人麻呂、小野小町、在原業平、和泉式部、藤原定家らの代表的な歌を、声に出して味わいます。

そして最後の第五回は《俳諧的生活のすすめ》。俳諧の「俳」というのはふたりです。お笑い、「諧」はみんなでお笑いあいあいとすること。どんなつらい人生だつて、ユーモアと和で読み直してみようというのが「俳諧的生活」です。

松尾芭蕉と横井也右の句や文章から、その生き方のヒントを読んでいきます。

お話しします。